

幸運を得た人の道徳的価値と内在的公正推論

○村山 綾 (関西学院大学大学院文学研究科・応用心理科学研究センター)・三浦 麻子 (関西学院大学文学部)

キーワード: 道徳的価値, 内在的公正, 公正世界欲求

内在的公正による推論とは、ある人物に起こった不運な出来事を、そのような因果関係が存在し得ないにもかかわらず、その人物の過去の道徳的失敗に原因帰属する(悪いことが起こったのは、その人物が悪い人物だからだと考える)ことである。Callan et al.(2013)は、長期的な目標に焦点が当てられることによるプライミング効果で公正世界欲求が高まった場合、その欲求を満たすためにこうした推論が行われやすくなることを示した。本研究では、公正世界理論の拡張のために、上述した知見が幸運な出来事の場合にも当てはまるかを検討する。公正世界が「善行には報酬が与えられ、悪行には罰が与えられる世界」だとすると、幸運な出来事も、幸運を得た人物の過去の道徳的成功に原因帰属(良いことが起こったのは、その人物が良い人物だからだと考える)され、このような内在的公正推論は長期的な目標設定によるプライミングによって促進されることが予測される。

方法

参加者 大学生 66 名 (男性 20 名、女性 46 名、平均年齢 20.09, $SD=1.12$) が質問紙にオンラインで回答した。

実験手続き 実験デザインは 2 (目標焦点: 短期 or 長期) × 2 (対象人物の道徳的価値: 良い or 悪い) の参加者間要因で、参加者はいずれかの条件にランダムに割り当てられた。(1) 短期目標焦点では今後 24 時間の活動内容について、今から 1 時間後、1~12 時間後、12~24 時間後、に区切って回答、(2) 長期目標焦点では今後の人生の目標について、1~5 年後、5~10 年後、10~15 年後、に区切って回答した。その後、目標焦点の操作チェック項目に回答し、宝くじに当選した人物の当選経緯に関する文章を読んだ。当選した人物が (1) 過去に窃盗の罪で在宅起訴された高校教員か、(2) 熱心に生徒の指導に当たる高校教員かで道徳的価値を操作した。文章を読み終えた後、道徳的価値に関する操作チェック項目、内在的公正に関する項目に回答した。

測定項目 (1) 目標焦点のプライミング効果の操作チェック (記述した目標を達成するために社会が公正である必要の程度を問う) 3 項目(7 件法)、(2) 道徳的価値

の操作チェック 1 項目(6 件法)、(3) 内在的公正推論 (例「宝くじの当選は、彼の日頃の行いが反映された結果と感じますか」) に関する 3 項目(6 件法)。

結果と考察

目標焦点、道徳的価値の操作はいずれも成功していた。内在的公正推論得点を従属変数とし、目標焦点×道徳的価値の 2 要因分散分析を行った (Fig.1) と、道徳的価値の主効果のみが有意であり ($F(1, 62) = 43.20, p < .001$)、良い人物とされた方が ($M = 3.28$)、悪い人物とされた方 ($M = 1.39$) よりも宝くじの当選をその人物の過去の行いに帰属させていることが示された。一方で目標焦点との交互作用効果は非有意であった ($p = .39$)。推論に関しては予測通りの結果が得られたが、目標焦点の効果は認められなかった。その原因としては、公正な社会を必要とする程度は長期目標条件 ($M = 5.07$) が短期目標条件 ($M = 4.00$) より相対的には高かったが、後者においても低い値ではなかったことが考えられる。また、本研究では大学生のみを対象としたが、特に長期目標の内容は属性や年齢によってばらつきがあると考えられる。今後は幅広い属性・年齢の参加者のデータも収集し、幸運・不運の質的な違いを含め、検討を進める必要がある。内在的公正推論に加え、「不公正は将来的に埋め合わされる」とする究極的公正世界推論との関連も合わせて検討するべきだろう。引用文献 Callan et al., (2013). *British Journal of Social Psychology*, 52(2), 377-85

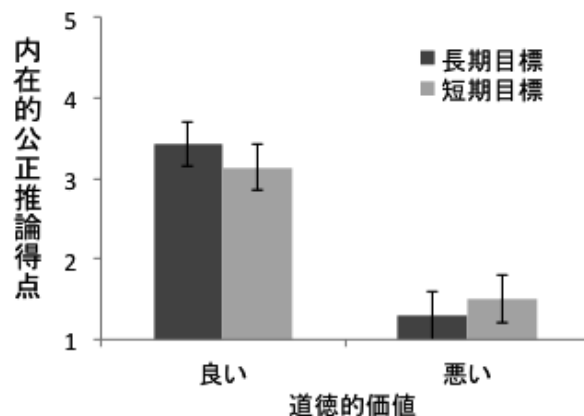


Fig. 1 道徳的価値と目標焦点の効果
※エラーバーは標準誤差